

北海道立釧路芸術館開館25周年

奈良原一高 写真展 時空をこえた光

2023(令和5)年4月22日(土)～6月18日(日)

主催：北海道立釧路芸術館、北海道新聞釧路支社 後援：釧路市、釧路市教育委員会、NHK釧路放送局、FMくしろ
協力：北海道立函館美術館 協賛：釧路芸術館ボランティアの会SOA

奈良原一高（1931－2020）は戦後日本を代表する写真家です。1956(昭和31)年に九州の産炭地等取材した作品「人間の土地」が反響を呼び、写真家として本格的な活動を始めます。3年後には北海道、渡島当別のトラピスト修道院と和歌山の女子刑務所という、外界から隔絶された場所に生きる人間の姿を主題にした作品「王国」を発表。その後は国外で長期滞在の上制作された「ヨーロッパ・静止した時間」や「消滅した時間」の連作、日本の伝統文化を対象にした「ジャパネスク」など、生涯にわたり、完成度の高い写真を制作しました。

奈良原の写真は、新鮮な映像感覚と深い思索に裏付けられた詩情豊かな表現を特徴とするものであり、国内外で高く評価されています。本展は、遺族より当館へ寄贈された作品全149点、北海道立函館美術館へ寄贈された「王国」から48点の作品をご紹介します。

－ 出品作品 －

■ Ⅰ. 1954-58

1. 無国籍地 (14点)

制作：1954-56(昭和29-31)年

プリント：1987-2017(昭和62-平成29)年

〈無国籍地〉は最初の個展「人間の土地」に先立つ写真群である。写真家が戦後間もない昭和20年代に大阪城の天守閣にのぼった際、眼下に広がる砲兵工廠跡地の光景に惹かれたことが制作のきっかけであったという。大阪と東京、王子の軍需工場跡地をさまよいながら撮影した一連の作品からは、勤労働員と空襲を体験し、思春期を戦争の中で送った世代ならではの、乾いたまなざしが際立っている。

2. 人間の土地 (24点)

制作：1954-57(昭和29-32)年

プリント：1975-2020(昭和50-令和2)年

1950年代に、奈良原一高は九州旅行で訪ねた桜島の黒神村と長崎沖の端島で、たくましく生きる人々の姿に強い感銘を受けた。二つの場所は共に海によって隔絶され、火山灰に覆われた土地と、狭い土地に炭鉱で働く人々が密集する島という、過酷な環境を特徴としていた。奈良原は両者を「自然対人間」、「社会機構対人間」という趣旨で対比し、人が生きることの意味を問う一連の作品〈人間の土地〉を個展で発表する。個展は贅嘔や池田満寿夫らも参加した若手芸術家集団「グループ実在者」の活動の一環として、仲間たちも展示を手伝ったという。この連作は明確なコンセプトのもとで制作され、現代日本写真の幕開けとして高く評価されている。

3. 王国 (48点)

制作：1958(昭和33)年

プリント：1972-1998(昭和47-平成10)年

北海道、渡島当別のトラピスト修道院を取材した「沈黙の園」と、和歌山市の女子刑務所を舞台とした「壁の中」の2部構成でまとめた連作。外部と隔絶された空間に生きる人間の存在を見つめたもので、修道院と女子刑務所を題材にすることで男性と女性、宗教と世俗、自由意志と強制という、相反する概念が提示されている。静謐さのなかに孤独感や悲しみなどをにじませた陰影に富む表現が注目を集め、奈良原はこの作品で写真家としての評価を確立した。彼の写真を代表する重要な連作として、1970年代から近年まで幾度も写真集が刊行されている。

■ II. 1963-74

4. ヨーロッパ・静止した時間 (10点)

制作：1963-65(昭和38-40)年

プリント：1972-76(昭和47-51)年

奈良原一高はパリでファッション写真撮影の依頼を受けたことをきっかけに1962(昭和37)年から約3年間ヨーロッパに滞在する。滞欧中に石造建築や古代からの遺跡が残るヨーロッパの風景から、日常とは異なる悠久の時間の流れを感じ、その感覚を「静止した時間」と呼んだ。写真家はこの連作を「ひとりの人間の個人的なヨーロッパとの出会いの瞬間でつづられている」物語として、写真集にまとめた。同作は1967(昭和42)年に日本写真批評家協会作家賞を受賞し、翌年には芸術選奨文部大臣賞、毎日芸術賞を受賞した。

5. 消滅した時間 (46点)

制作：1970-74(昭和45-49)年

プリント：1972-97(昭和47-平成9)年

ヨーロッパでの制作活動から帰国する途中で奈良原一高は、親交のあった美術家、河原温(1932-2014)の住むアメリカを訪ねた。ニューヨークで活躍する河原の姿を見て、自身もこの国で制作を行うことを決心する。奈良原は、1970年から74年にかけて広大な国土を縦横に巡りながら撮影を続け、帰国後の1975(昭和50)年に写真集『消滅した時間』を刊行した。写真家は米国の大都会の様相を独特の乾いた感覚で切り取った。それぞれの作品はシャープな構図とモノクロームのデリケートな諧調で表現されている。

6. ジャパネスク (32点)

制作：1968-69(昭和43-44)年

プリント：1969-98(昭和44-平成10)年

1960年代前半、〈ヨーロッパ・静止した時間〉を生み出した滞欧体験は、奈良原一高にとって日本という国をあらためて見つめなおす契機となった。祖国の伝統文化を主題に、欧州の光景を題材にした時のように、異邦人の視点で切り取った作品の制作を始めた。1968(昭和43)年から翌年にかけて『カメラ毎日』誌連載「日本図譜」として発表、70(昭和45)年に写真集『ジャパネスク』を刊行した。一連の作品は能、相撲、刀剣、禅僧などを題材に、日本の伝統文化の世界を新鮮な感覚で再構成した、迫力ある構図の表現を特徴とする。

■ III. 1964-98

7. ヴェネツィアの夜 (15点)

制作：1964-85(昭和39-60)年

プリント：1983-97(昭和58-平成9)年

奈良原一高は1964(昭和39)年にはじめてヴェネツィアを訪れ、その光景に魅了された。9年後に再訪した時には、夜のサン・マルコ広場で明かりが周囲の回廊を照らして浮き彫りにする情景に惹かれ、撮影を重ねていく。広大なアメリカとは対照的に、海と運河に囲まれた小島に多くの人々が暮らす濃密な都市空間は、強い関心の対象であった。一連の作品では、光と闇のおりなす夜の街並みが、詩情豊かに表現されている。写真集『ヴェネツィアの夜』(1985年刊行)は、日本写真協会年度賞を受賞した。

8. 円 (8点)

制作：1998(平成10)年

プリント：1998-99(平成10-11)年

奈良原一高は1988年にネフローゼ症候群、1990年に胸腺腫瘍手術を受け、3年ほど治療のためにカメラから離れた。写真家は療養生活のなかで自身の肉体と向き合うことで、新たな作品の制作の主題を手に入れた。「円」は、療養中に自分の視界が円形に見えるように感じた体験から着想を得た作品。生活の中から着想を得たヴィジョンをモチーフとしている。